大学出版

2000 冬

No.44

大学と社会を結ぶ
知のネットワーク

The Association of
Japanese University Presses
大学出版部協会

大学出版
44号

Winter· 2000

読書の周辺　『ア・コース・イン・ミラクルズ』が喚起するもの　▼　大内　博　――1

読書の周辺　パリの新国立図書館　▼　高橋　治男　――6

一九九九年度　夏季研修会報告　▼　山本　俊明　――12

オンデマンド出版の現状と可能性　▼　秋田　公士　――15

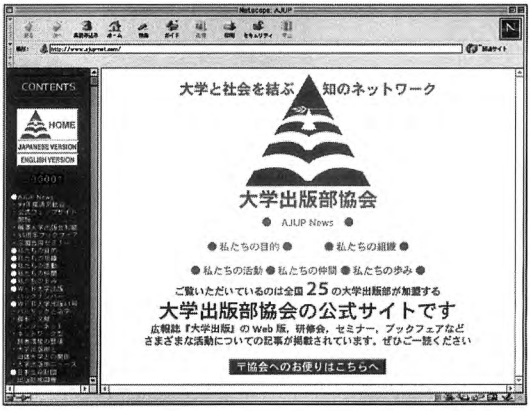
歩く・見る・聞く　知のネットワーク17　――18

大学出版部ニュース　――20

新刊案内1999.10-12　――29

表紙イラスト＝ヨースト・アマン『職人図鑑』より
大学出版部協会マーク・デザイン＝道吉　剛

〈書籍の表示価格は税別です〉



大学出版部協会ウエッブサイト
http://www.ajup-net.com/

『ア・コース・イン・ミラクルズ』が喚起するもの

大内　博

言葉が飛び交う時代である。人間の歴史の中でこれほどまでに多くの情報が入手可能だったことはなかった。毎年膨大な量の本が出版され、雑誌、新聞、ラジオ、テレビ、映画、ビデオ、携帯電話、ファックス、そして、インターネットなどなど、様々なコミュニケーションの媒体を通して、人間同士の関わり合いが展開されている。そして、その中心にあるものは言葉だ。

私は大学で社会言語学、特にコミュニケーションに焦点を絞った分野の講座を担当していることもあり、人が人と接触する時に、言葉がどのように働き、どのように使われているかには特に関心を持っている。そういう観察をしていて、最近感じることのひとつに、「言葉が軽くなってきている」のではないかということがある。

厳密に言えば、「言葉が軽くなる」ということはあり得ない。言葉は言葉である。正確に言えば「言葉と言葉を使う者の関係が軽くなっている」ということかもしれない。そんなことを考えるきっかけになったのは、「死ね！」という言葉を小学生が友だちに向かって平気で使っているのを聞いたことであった。ものすごい喧嘩をしているという状況でもなく、相手に対して非常な憎悪をもって叫んでいるのでもない。いわば遊び半分で「死ね！」などと言っている。

こういう言い方はアメリカでも聞かれる。If you do that, I'll kill you. 文字通りに翻訳すれば、「そんなことをしたら、あなたを殺すよ」となる。これは子どもだけではなく大人でも使っている。ギャング映画のひとこまでもない、日常生活の中で、一種の警告の表現として使われているのである。これを聞いた人も、相手が本気で「殺す」だろうなどとは考えない。白髪三千丈と同じ誇張表現であると解釈することも可能かもしれない。誇張であることは確かであるが、問題は、誇張の対象が「殺す」という生命に関わる衝撃力を持った言葉であるということにある。

その結果何が起こるか。「殺す」と言うだけで殺さなければ、それはめでたいことではあるが、言葉の現象として考えれば「殺す」という言葉の力は弱体化する。別な言い方をすれば、「殺す」という言葉と、それを使っている人間の関係が弱体化する。言葉の持つ意味性が希薄になる。

これと同じように、私たちの身の回りを見回してみると、言葉を希薄にしている現象がやたらに目に付く。日本の高速道路の速度制限はだいたいの場合、時速八〇キロである。しかし、この制限速度を守って走っている車はそれほど多くはない。九〇キロ、一〇〇キロは普通で、一一〇キロ、一二〇キロもざらである。そういう車の流れの中で制限速度を守ったりすると、かえって危険を増すというようなことも考えられる。雨が降ると、制限速度は時速五〇キロになることが多いが、これなども全くと言って良いほど無視されている。

これは高速道路をドライブしたことのある人なら誰でも知っている事実である。警察だって知っているに違いない。制限速度が有名無実になっている。言葉という観点から言えば、「制限速度」という言葉の意味が失われている。たぶん、そういう事情を考慮して、制限速度を時速一四〇キロにしようという話がでてきたのであろうが、言葉と現実の距離を埋める方向へと改正してもらいたいものである。

もう一つの例をあげると、「激安!」という言い方がある。観光地など車を走らせていると、時々この看板が出ていて、果物や野菜などが売られていることが多い。「激安」というのは、まさに激しい言葉で、ずいぶんと強いインパクトのあるものだが、実際の価格は多少は安いとしても、とても「激安」という言葉のイメージに応えるほどの安さではない。これはまさに商魂が言葉を操っている好例で、この種の例はテレビのコマーシャルを初めとして枚挙に暇がない。

このような現象に共通していることは、言葉の意味と現実の乖離である。言葉が持っている意味と、それが指示ないしは引き起こす現実との間のズレが増大しているように見える。これは、言葉と現実の間にある宿命的な問題ではあるが、その度合いが、現代の忙しい生活の中で加速的に拡大しているのではないかと思われる。

日本には古来から「言霊」という概念が存在する。言葉の中に「霊的な力が宿っている」という考えであるが、私もこれは真実ではないかと思っている。しかし、私たちが言葉をあまりにも気軽に、誠実さを欠いた心で使うとき、言霊の力は私たちのものとなることはないのではないかと感じる。あわただしい生活にただ流され、言葉と現実が乖離した状態の中で使う言葉からはエネルギーが失われてしまうのではないか。自分の現実を静かに見つめ、誠実に言葉を発するとき、まさに言霊が動き出し、私たちと関わり出すのではないかと思うのである。

私は一四年ほど前に、『ア・コース・イン・ミラクルズ』

(*A Course In Miracles*) という一二〇〇ページから成る本に遭遇した。この本がどのようにして誕生したか、その経緯をこの本の序文で読んだときに、まさにその意を強くしたのだった。

時は一九六五年に遡る。ビル・テットフォードはニューヨークのコロンビア大学医学部の教授であり、同大学所属の長老派教会の病院の心理学部の責任者をも務めていた。ヘレン・シャックマンは同学部の教授であったが、『ア・コース・イン・ミラクルズ』のドラマはこの二人が発した言葉から始まった。一九六五年の六月のある日、ビル・テットフォードはコロンビア大学全体の学部長会議に出席したが、学部長の仕事にほとほと嫌気がさし、落ち込まざるを得ない状態であった。各学部の利害の対立、調整を行うための会議であったが、調整どころか対立の溝は深まるばかりであった。ビルはヘレン・シャックマンと数年間同じプロジェクトに取り組んでいたが、あるとき、そういった会議に出席する直前に、ビルが There must be a better way.（これよりも良いやり方があるに違いない）と思わずつぶやくようにヘレンに言った。それを聞いたヘレンは、すかさず、We'll find this together.（一緒に見つけましょう）と答えた。

この会話が交わされてしばらくして、ヘレンは声を聞き始める。冷徹な心理学者であるヘレンはこの異常な現象に自分は気が狂ったに違いないと思って、ビルに相談する。ビルはともかくどういう言葉なのか、それを書き留めて見たら良いではないかと提案し、ヘレンは半信半疑ながらも自分の耳に聞こえる声を書き始める。ビルはヘレンが手で書いたものをタイプするという仕事を自ら買ってでる。こうして二人のチームワークができあがり、様々な紆余曲折を経ながらも、七年間にわたってヘレンはこのメッセージをチャネルとして伝え、できあがったのが『ア・コース・イン・ミラクルズ』である。

いわゆる超常現象を通じて一二〇〇ページに及ぶメッセージが伝えられたわけであるが、そのチャネルになったヘレン・シャックマンは理知的で、無神論者で、スピリチュアルなことには懐疑的で全く関心のない人であった。にもかかわらず、そのメッセージの深遠性に心を動かされ、理性と心の葛藤に悩みながらもその仕事を完了したのである。

それでは、この本はいったいどのような内容の本なのだろうか。英語では既に一五〇万部出版され、フランス語、スペイン語、中国語でも既に出版され、現在様々な言語への翻訳作業が進行中である。実は日本語への翻訳は私が縁があって取り組んでいるところであるが、あと四年後に出版の予定で作業を進めている。それだけ多くの人々の心を動かしているこの本のメッセージはきわめて深遠であるが、その教えの本質はタイトルの『奇跡についてのコース』（仮題）に要約されている。この本の冒頭は次の言葉で始まる。

これは、奇跡についてのコースである。これは必修のコースであり、あなたに任されているのはいつそれを学ぶかだけである。自由意志とは、あなたがカリキュラムを設定できるという意味ではなく、ある時に何を学ぶかを選択できるという意味である。このコースは「愛」の意味を教えようとするものではない。「愛」の意味を教えることは不可能である。このコースの目的は、「愛」が存在することについての自覚を妨げている障壁を取り去ることにある。「愛」はあなたの生得の権利として存在する。「愛」の反対語は恐れであるが、全てを包含するものに反対語はない。

したがって、このコースは次のように端的に要約することができる。

実在するものは、存在を脅かされることはない。
非実在なるものは存在しない。

私自身の理解不足のために、今の時点でこのコースのメッセージを正確に要約して伝える自信はない。しかしながら、私が体験した真実ならば私なりに伝えることは許されるかと思う。

まず、「奇跡」の意味であるが、このコースではいわゆる「常識ではあり得ない不思議な出来事」という意味ではなく、「私たちが知覚（物の見方）を変えることによって愛を体験すること」という意味で使っている。やや極端な例をあげれば、自分の娘をレイプした人間を、その行為は責められるものとしながらも、赦すことができたときそれは奇跡であるという。つまり、「奇跡」とは、外的な出来事ではなく、完全に心の動きであり、赦しの行為であり、認識の転換であるとコースは教える。

このコースがヘレン・シャックマンを通して伝えられた主たる目的は、組織としてのキリスト教の中で歪められてきたイエス・キリストの教えを正しく教え直すことであるとコースは言う。例えば、人間は罪深い存在であるというのはキリスト教において一般的な概念である。罪のある人間を救済するために、イエス・キリストは十字架に架けられたと考えられているが、イエスは赦しを教えるためにこそ十字架に架けられることを選択したとコースは教える。すなわち、人に神の愛を教え、人を愛し、人を癒すことしかしなかったイエスが十字架に架けられても、それでもなお兄弟としての人間を責めることなく赦し、愛するという宣言をするために十字架に架けられたのだとコースは語る。

このコースの目的は序文にも述べられているように、愛を教えることではなく、愛を体験することを妨げている障害物を取り除くことである。その障害物の最たるものは兄弟（姉妹）に対する裁きの思いであると言う。私たちの日常生活をちょっと振り返って自分の心の在り方を内観して

みれば、私たちは殆どいつも他人を裁いていることに気づくのではないだろうか。言葉に出す出さないは別にして、他人の欠点を探し、批判するというのは現代社会のきわめて一般的な心の在り方である。そういう状況をふまえて、「あなたの兄弟（姉妹）こそあなたの救世主である」とコースは宣言する。つまり、あなたが兄弟を裁くことなく、そこに愛だけを知覚し、体験したとき、初めてあなたは救われるというのである。

これだけでも、従来のキリスト教の教えに対して急進的に対決した教えであることはおわかりいただけるのではないだろうか。このコースの言葉にインスピレーションを与えられた人々が、「愛の教師」としてこの教えを広めている。それは別に教会を建て、宣教師として教えを広めているという意味ではなく、自らの兄弟姉妹を自分の救世主とする活動である。恐れではなく、愛を持って人を見、人に接し、愛を体現しようとする生き方、それが「愛の教師」の仕事であるという。

この小論の前半で、言葉と人の関わり合いの意味が希薄になっているのではないかと書いた。その関わり合いが希薄になるとき、「言霊」の力を体験することもできなくなるのではないかとも書いた。

これに対して、ビル・テットフォードとヘレン・シャックマンの体験は、言葉との関わりを深めることによって、「言霊」が呼び起こされ、ルドルフ・シュタイナーが言うところの〝高次の魂〟との接触が可能になったことを示しているとも考えられる。

現代に生きる私たちは実に忙しい生活を強いられている。いや、正確に言えば、それを選択している。そういう忙しさの中で、言葉との関わりが希薄になり、存在が軽くなり、宙に浮きかねない状況にあるとも言える。

『ア・コース・イン・ミラクルズ』に言わせれば、〝実在するものは存在を脅かされることはない〟。つまり、私たちと言葉との関係が希薄になって、その分言葉が表し得る真実から遠ざかってしまったとしても、実在する真実は何ら影響を受けることはない。とすれば、実在するものとは何かを、言葉との関わりの中で探究するのもおもしろいのでないかと考えている。

（玉川大学教授）

パリの新国立図書館

高橋　治男

今年の夏は、所属する学会の会合に出席して今後の活動計画を決定するためにフランスに行き、そのあと資料収集その他の目的で合計二ヶ月間パリに滞在した。友人とふたりでサン＝マルタン運河と東駅の間にあるユジェーヌ・ヴァルラン街に小さなアパルトマンを借りて住んだのだが、トルビヤックに新設・開館した国立図書館「ＢＮ（ベー・エヌ）」をいつでも利用できる態勢にしておこうと、学会の仕事がまだ終わらないうちに、早速登録をしに行った。

パリとその周辺の交通網は、新線敷設や延長により年々充実・拡大している。それだけ首都圏の人口集中と外国人の流入も激しいのだろう。今夏も八月にはサン＝ラザール駅からほぼ東北東のモーの方角に向かって「エオール（風の支配者アイオロス）」と呼ばれるＲＥＲの新線が開通し、北駅と東駅との間の地下深くにマジャンタ駅が誕生した。

驚いたことに、新しいＢＮの開館に間に合うように、メトロも14番の新線を開設していた。マドレーヌ寺院からシャトレ、リヨン駅、ベルシーを通って「ビブリオテーク・ナショナル・シット・フランソワ・ミッテラン」を終点とする片道約一五分の無人電車。始発駅の次のピラミッド駅はリシュリュー街に近いから、これは新旧のＢＮを結ぶ線なのだ。もしかしたらこの地下道路を書籍運搬にも利用したのではないかと思いながら、オペラ通りの地下深く下りていった。メトロはやや小型の四両編成で、おそらく上り下りの全体で一五台ほどが自動操縦で稼働しているのだろう。ベルシー駅などでは、上下線が車両の前後をぴたりと合わせて同時に停止する。

建設を企画した前大統領フランソワ・ミッテランの名で呼ばれる新ＢＮの敷地は、ベルシーの対岸にあって一三区の東端に位置している。以前オーステルリッツの貨物駅だった場所だから、6番メトロのケ・ド・ラ・ガール駅でおりて歩いてもよい。バスだと62番か89番だが、カルチエ・ラタンから行くなら89番が便利だし、これがいちばん歩く

距離が短い。とにかくパレー・ロワイヤルのギャルリーを含む地所よりもひとまわり以上広い敷地なのだから、アプローチの仕方もいろいろとあるわけである。

この敷地周辺にできた新しい街路や緑地帯には、フランソワ・モーリヤック、デュアメル、アヌイ、ラクロ、レイモン・アロン、アベル・ガンス、ヴァレリー・ラルボー、ジャン・ヴィラールなど、これまでパリでは通りの名に使われていなかった作家や芸術家の名前が付けられている。ここに挙げた名前は、ラクロをのぞけばみな二〇世紀の人名である。

セーヌ河沿いのケ・フランソワ・モーリヤックから
階段状の大舞台とL字型の塔を見上げる

新しいBNの設計者はドミニク・ペローであるが、もしかすると最近の駅構内のデザインにも彼が参与しているのかもしれない。あるいは施工者が同じということも考えられる。BNの敷地は、最も新しいRER「エオール」線のサン＝ラザール駅やマジャンタ駅の連絡通路の床と同じ造りで、固い白木の木材を張り巡らした広大な舞台となっており、セーヌの流れと対岸のベルシー公園を見下ろしている。その四隅にそびえているのは一八階建てのL（エル）字型、塔状の高層建築である。この四棟はいずれも七階までが事務局の部屋で、それより上は全部書庫になっている。四棟を結ぶ回廊状の建物は、広大な木造舞台の下に隠されており、舞台の中程まで進んで行くと、中央にぽっかりと巨大な長方形の穴があいている。眼下にひょろ長い赤松を林状に植えた中庭や、それを囲む二階建ての回廊棟と内部で動く人影が見えた。そこではじめて「あれが閲覧棟だ」とわかるのである。

東玄関と西玄関は点対称に位置し、どちらからはいるにしても、いかめしい警備員に鞄の中味を見せたあとで、長いエスカレーターで中庭に面した二階の一隅に下りて行く。リシュリューの旧BNとはまるで違った未来都市の風貌、しかもはるかに厳重な管理体制の臭いがして、機能的ではあるものの人間味の薄れた雰囲気がすでに漂っていた。

すべてがコンピューター化され、機械化されている。旧

一階回廊から見える中庭とL字型の塔

BNのカードがあるので、わたしの登録は簡単に処理され、面接のあとすぐに新しいカードを受け取ることができた。登録料を支払い、受付で鞄を預け、必要なものだけを備え付けの書類箱に入れ、利用者カードを使って駅の自動改札のような入口を通過すると、重い扉を二度開き、地の底に向かうようなエスカレーターで三〇メートルほど下って行く。閲覧室や座席を決めてくれる受付はその地の底にあった。だが、またしても重い扉をふたつ通り抜けると、そこは中庭と同じ平面の、明るい回廊であった。

回廊沿いの外側に北棟から東と南を経てぐるりと西棟のはずれまで、KからXの閲覧室があり、ひとつ上の階には、同じようにAからJまでの閲覧室があって、各階の両翼の読書閲覧室は原則として内部でつながっている。各室には、パソコンやワープロ用のコンセントと照明付の一二〇席ほどの座席と、閲覧や検索の相談に応ずる受付があり、別の一隅には数台の検索用端末機が配置されている。W室にはさらに約一〇〇席のマイクロリーダー席があり、X室にはマイクロフィッシュ専用の席もある。二室単位で奥の部屋にはコピー機があり、印刷はすべて、図書館員に依頼し、費用はあらかじめ購入しておいたカードで支払う方式になっている。

とにかく最先端の設備を完備しているし、座席数も十分にあって、リシュリュー街のときのように行列をつくって空席を待つ必要がなくなったので、新設BNは、さぞかし便利なのだろうと期待していた。だが、実状はそうではなかった。第一に参照したい辞典類がすべての部屋に揃っているわけではないから、座席の取り方によってはとんでもない距離を歩かねばならない。つまり広すぎるのである。わたしは初日に、自分の使いたいメートロンの労働運動の人名辞典がどこにあるかを調べて、次回にはその近くに席を注文したが、そうすると今度は、別の文学関係の資料からは遠ざかってしまうのだった。

確かに器械設備は整った。そしてもともと世界最高の蔵書数を誇る図書館である。それは、歴史的には、一五三七年にフランソワ一世がモンプリエで出した王令のおかげだった。この王令によって、フランスで印刷されたすべての

書籍が一部ずつ必ず王立図書館に収められるようになったからだ。もちろん大革命のあともこの規則は守られてきた。しかし世界に誇る蔵書もいまや古くなり、今日二〇世紀前半の図書までがマイクロフィッシュ化されつつあって、その作業中のものは参照できない。例えば一九三〇年代のWho's who in Americaは、今回ついにその所在がわからなかった。リシュリュー街では、サル・ド・レクチュールにもペリオディックにも備わっていたはずである。トルビヤックでは、司書たちは誰ひとりとしてその在処を知らずにわたしをたらい回しにした。

とにかく新BNでは、今のところ文献もその設備もきちんと機能しているとはお世辞にも言えない状態なのだ。失礼ながら、ひとつには図書館員の多くがコンピューター操作の面では技術的に未熟で、いまだに設備を使いこなせないでいるという面もあるのかもしれない。だが一方ではコンピューター・システムの導入によって、使い手は未熟でありながら早くも器械依存の習性を身につけてしまい、いっさいの責任をコンピューター・システムに転嫁する傾向もあるように思われる。

まず、端末機で検索する方法は、コンピューター操作に慣れていない限り、なかなか大変である。わたしも自分でやっては見たが、ある日期待した結果が得られず、ついにカウンターに並んで司書に相談した。待つこと一五分。やっと順番が来て、一九二八年にバルビュスが創刊した週間文芸新聞『モンド』のマイクロフィルムを注文すると、司書のマダムは端末機で調べて「そんなものはない。『ル・モンド』の間違いではないか」と言う。彼女はバルビュスの名前もこの新聞名も知らなかったので、わたしは説明せねばならなかった。「リシュリューでは何度も参照したことがあるのです」とわたしは言った。最初はわたしの間違いだと思いこんでいた彼女も、ようやく信用してくれたが、それでも「画面に出てこない以上、しょうがない」との反応だ。そのときわたしは気がついた。彼女の背後の書架に

閲覧室のひとつ

かつてさんざん利用した三冊本のペリオディックのカタログがあるではないか。「あれに載っているはずです。」じつはこれで片が付いたわけであるが、図書館員の彼女も不勉強で、第二次大戦以前の文献は、コンピューターに打ち込まれていない場合もあることを知らなかったのである。朝九時に到着して、『モンド』のマイクロフィルムを実際に見ることができたのは、午後三時頃であった。

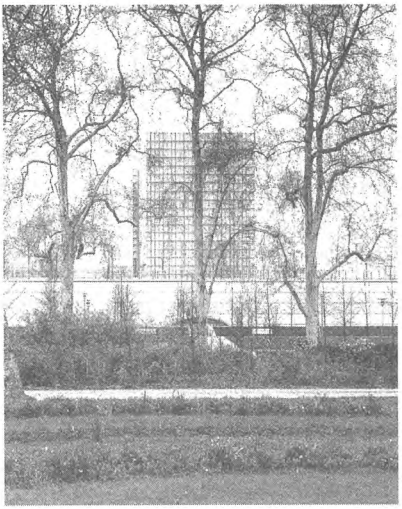
一九三〇年代にパリに亡命していたドイツのトロツキー派グループが『ウンザー・ヴォルト』という雑誌を発行していたが、この雑誌に掲載された一論文を必要とするので、新BNで参照要求をしたときのことである。例によって、BNに存在することが判明するまでにかなりの時間がかかったが、とにかく参照可能だというので、予約をしてその日は帰った。翌日勇んで行き、再び待つこと久しく、ようやく反応があったと喜んだのもつかの間、「この雑誌は廃用だから、参照不可能だ」という。「どうしても見たければ特別申請をしなさい」と言われて、理由を添えて規定通りの申請書を書いた。結果は一週間ほど待たされたが、やはり駄目。「破損の度合いがひどいために見せられない。マイクロフィッシュ化も不可能」との返事だった。参照が可能か不可能かも、あらかじめわかるわけではない。誰かが閲覧を要求したときに初めて現物を見て検討されるのだそうだ。この結論を得るまでに、四回BNに通い、長時間待たされている。もっとも、つねにほかにも目的をもって出かけているから、まるまる時間を無駄にしたわけではなかったけれども。

《アンリ・プーライユ友好学会》と《ヴィクトール・セルジュ研究会》の友人ジャン・リエールと一緒に、日刊新聞『コメディア』の一九一〇年代の紙面をマイクロフィルムで見ていたとき、どういう訳か約一週間分ほどの紙面が完全に欠落していることを発見した。『コメディア』なら、欠号なしの現物がBN分館のアルスナル図書館にあるはずなので、どうしてこのような不完全なマイクロフィルムを作成したのか訳がわからない。きっと作成時に担当者がうっかりとばしてしまったのであろう。フランスではよくあることである。わたしたちはしかたなく日を改めて、今度は《プーライユ学会》の事務局長でBN職員のパトリック・ラムセイエールと一緒に、アルスナルで『コメディア』の現物を参照せねばならなかった。じつはBNにはパトリックのような優れた学者がたくさんいるのだが、それはこの話とひとまず別である。

BNの名誉のために報告しておくが、古い定期刊行物のマイクロフィルム化とその不備の修正は、ゆっくりとであるが、進んではいるのだ。わたしがすでに日本で入手していた『モンド』のマイクロフィルムは、かなりのページにわたって破損やしわや汚れで読めない部分があったうえに文字列も波を打っていたけれども、今回トルビヤックで参照したフィルムでは、あらたに保存の良い紙面を発見して

撮り直し、差し替えてあったので、これまで不鮮明だった部分を完全に読みとることができた。フランスでは時間が猛烈にかかるけれども、とにかく完璧に近づく歩みをやめることはないらしい。

頻発するマイクロリーダーやコピー機の故障など、新図書館の現状に対する不満を数え挙げれば、きりがないであろう。器具の故障が起こるたびに、いつでもその処理にとりかかるまでに膨大な時間がかかっている。パトリックの話だと、開設前の昨年冬には、排水溝がうまく機能しなかったために、一階の床がしばらく水浸しになっていたと言う。一階にはセーヌ河の水位よりも低くなっているのだ。また電気回線の故障で書庫から閲覧室へ書籍を運ぶトロッコが、一週間近くもストップしたこともあると聞いた。



南東より見たＢＮの塔

わたしのフランス人の友人たち、その多くは二〇年代、三〇年代の研究家であるが、彼らは「トルビヤックには行きたくない」と言っている。とりわけコンピューター端末機による検索に慣れていない世代の研究者は、新ＢＮには近づかない。ありがたいことに彼らがとくに利用するサル・ド・マニュスクリはトルビヤックに引越しせず、いまでもリシュリュー街に残っている。

辞書類を参照するため位なら、新ＢＮには行かぬ方がよい。もし一九七〇年代以降の定期刊行物を調べるのだったら、あまり時間を失うことなくかなり的確に成果を得ることができるだろう。しかしわたしのように、一九三〇年代を対象として調査をする場合は、いまのＢＮでは時間がかかりすぎる。あの図書館には待たされに行くようなものだ。おそらくあと一〇年も経てば、二〇世紀の作品のマイクロフィルム化やマイクロフィッシュ化も進み、現物は無理でも中身だけはすべて参照可能な時代がくるであろうし、コンピューター・システムのなかで現在機能していない部分もその頃は完全に動いているに違いない。しかし、その頃までわたしは待っていられそうもない。かりに待てたとしても、その頃は何一つ現物では見ることができないというあらたなゆゆしい問題が生じているに違いない。どうやら、リシュリュー街の、それもあの懐かしいサル・ド・マニュスクリのなかで、わたしのＢＮでの勉強の時代は終わっていたようである。

（中央大学教授）

一九九九年度 夏季研修会報告

山本俊明

一九九九年度大学出版部協会夏季研修会が九月二日～四日、湯河原厚生年金会館を会場に開催された。参加者は二三大学出版部から六三名であった。

大学改革の中の出版部

「大学は大きな変革のときを迎えている。大学にその基盤を置く大学出版部も自ずとその役割や大学における位置が変化するのではないか。大学はどこに向かって改革されようとしているのか」。

研修会第一日に計画された基調講演のテーマは、このような問題関心から設定された。講師として長年ジャーナリズムの世界から日本の教育問題を論じてこられた多摩大学、山岸駿介教授が招かれた。「大学改革の動向と課題――これからの大学はどうなるのか」という主題の講演で、山岸教授は、一九九一年の「大学設置基準の大綱化」以降に始められた大学教育の改革と最新の国立大学の独立行政法人化への動きをスケッチされた。

大学改革といっても、必ずしも大学の内発的な動機からはじめられたものではない。文部省の主導によるもので、諸大学は文部行政に誘導され、「カリキュラム改革」（九七％の大学）にはじまり、「自己点検・自己評価」（八八％）、「シラバス作成」（九二％）、「学生による評価」（四六％）、「ファカルティ・ディベロップメント」（三六％）などに取り組んできた。内発的改革ではないとしても、確かに、シラバスの作成などはこれまでになかった大学における授業改革に結びついていくし、カリキュラム改革によって、一年生から専門科目を履修できるようになり、また、教養演習が設けられるなど新しい教育の方向が打ち出された（大学一年生を対象にした、東京大学出版会の『知の技法』など「基礎演習テキスト」シリーズが出版され、大学外にも多くの読者を得た）。

しかし、専門教科に重点が移動したために、大学における教養教育（Liberal Arts）が危機に瀕しているのではないかという危惧も出ている。幅広い知識を与え、実用的な意味はないとしても深く豊かな知的遺産を身につけさせるという、大学がこれまで重視してきた教養教育が姿を消した。これに伴い大学の教科書の性格も大きく変わった。

このような教養課程と専門課程の区別がなくなったこと

以上に深刻なのが大学生の学力の低下にどう対応するかという課題である。内発的でないとしても大学が授業改革・カリキュラム改革を積極的に進めざるを得なかった理由もそこにある。高校時代までに習得しているはずの基礎教育を大学で実施せざるを得なくなっている。予備校などに基礎教育を外注化している大学もある。授業について来ることができない少なからぬ学生たちを抱え、私語が多く授業が成り立たない状況の中で、大学教育とは何かが問われている。当然、これまで「教科書出版」を出版のひとつの柱としてきた大学出版部にも、大学における教育とは何かが問われている。

今回の講演は、大学および大学院の教育改革が中心であり、教育と並ぶ研究の改革については、残念ながらほとんど触れられなかった。文部省が大学に「自己点検・自己評価」を促す理由には、主に大学の研究状況に対する不満があると指摘されたが、大学でどのような研究体制の改革がなされているのか、その成果としてどのような学術専門書が生み出されようとしているかについては、語られなかった。研究における大学改革は、これからの課題であるのだろう。

大学出版部ケーススタディ

大学出版部協会は現在二五大学出版部で構成されているが、歴史も一〇〇年を越える出版部もあるし、まだ設立数年の大学出版部もあり、規模もさまざまである。夏季研修会恒例の「大学出版部ケーススタディ」では、そのような個性ある出版部が現状を報告し、それぞれの出版部の活動状況を互いに知るよい機会となっている。今回は、東京電機大学出版局と放送大学教育振興会の二出版部が報告した。

東京電機大学出版局は、一九〇七年、「電気・機械技術者を養成し、工業教育の普及をはかる」ために設立された大学の一組織として、大学創立と同時に設立された。以来、教科書の作成、電気雑誌の発行などに取り組み、現在では、理工系の専門書、理工学書を中心とした大学教科書・参考書の刊行、工学技術書・科学啓蒙書、電気関係の各種国家資格試験受験参考書を刊行している。他の大学出版部にはないユニークな出版物が、高等学校用「文部省検定教科書」で、家庭、農業、工業などの科目で教科書を一〇点近く出している。大学教科書としては、理工系だけでなく、経済学、哲学、心理学など人文社会系の教科書も出しているが、多くは学内で使用されるに留まっている。東京電機大学では、大学改革の一環として、セメスター制が導入され、教科書もそれに応じた内容に見直しをしている。また学生の状況に合わせた内容に変えていっているという。

大学出版部の中でも独自な性格は、CD-ROM付きの書籍など、電子媒体を使ったマルチメディア出版物の刊行に見られる。年間刊行点数四〇ほどのうち四、五点がCD-ROM付き書籍で、編集作業はデータの確認までが含ま

れる。もっとも、書籍の原稿の入稿もほぼ一〇〇％がデジタルデータであるという。これからの学術書出版とその編集のあり方の最先端を走っている出版部である。

放送大学教育振興会は、放送大学の教科書を製作し供給することを目的として、一九八四年に設立された。毎年、約三〇〇の開設科目のうち七〇数科目の新刊・改訂版を刊行している。放送大学は現在学生数七万三〇〇〇人で、各科目、一〇〇〇部から多いものでは一〇〇〇〇部を印刷し、そのうち七〇％は放送大学の学生が購入している。しかし、大学・短大などで教科書として採用される部数もかなり増えている。一九九八年度の実績では、一〇〇部以上の採用大学は、国公立大学二三校、私立大学九三校、短期大学二〇校、専門学校ほか一五校であり、さらに増加させていきたいという。いわば教科書の製作・販売に特化した大学出版部を目指しているのである。

放送大学は、今後、二〇〇二年度から大学院（定員一〇〇〇人）を開設する予定である。また大学は一五歳以上に入学を認める方向にあるという。それに伴った新しいタイプの教科書、教材が刊行されてくるであろう。放送大学教育振興会は、大学出版部協会の一員として、大学出版部の新しいあり方を創り出していっている。

第三回日・韓・中大学出版部協会合同セミナー報告

夏季研修会では、編集部会、刊行助成部会、営業部会、幹事懇談会などのプログラムがあったが、ここでは最後に六月に韓国・ソウルで開催された「第三回日・韓・中大学出版部協会合同セミナー」の報告に簡単に触れよう。日本からは、九名の代表団を送り、「大学出版部の社会的役割を考える」を主題に、それぞれの国の大学出版担当者が発表し、討論をした。中国では、出版社全体でみても、大学出版部の売り上げが上位に位置しているほど、大学出版が大きな役割を果たしている。韓国では、これまで教科書出版が中心で、学術書の企画が少なかったが、学術書の企画出版を目指したいという報告がされた。日本からは、大学出版部の中で、ビジネス書を中心としたユニークな出版活動をしている産能大学出版部の事例と大学改革の中での東京大学出版会における出版活動の方向性が報告された。それぞれの国における大学出版の現状と課題は明らかになったが共通の主題を見出すまでには至っていない。今回のセミナーの準備段階では、日本から、基礎的データを交換し、議論できる環境を整えてからセミナーを開催したいという提案もしたが、この課題については、来年の夏季研修会と前後して日本で開催される「第四回三か国合同セミナー」に持ち越された。日本では、準備委員会が組織され、すでに同セミナーの準備がはじまった。基礎的データの収集と比較検討などを通して、日・韓・中の大学出版部協会でセミナーを継続していくための土台作りがなされることに期待したい。

（聖学院大学出版会・大学出版部協会幹事）

〈第十八回編集者の集い〉

オンデマンド出版の現状と可能性

秋田　公士

大学出版部協会編集部会では、編集者相互の研修を目的として、毎年《編集者の集い》を開催してきた。第十八回を迎えた今回は、左記の要領でシンポジウムを開催した。

日　時　十一月二十五日（木）十五時～十八時三十分
会　場　東京電機大学十一号館十六階　大学院会議室
テーマ　オンデマンド出版の現状と可能性

▼基調講演
中西　秀彦　氏（中西印刷株式会社　専務取締役）

▼ケーススタディ
左田野　渉　氏（株式会社ブッキング　取締役営業企画部長）
藤本　仁史　氏（株式会社紀伊國屋書店〔電写本〕システム営業本部　ドキュメントシステム部長）
眞田　毅　氏（株式会社デジタル・パブリッシング・サービス　代表取締役副社長）

▼パネルディスカッション
発表者全員（コーディネーター　植村　八潮　氏）

《編集者の集い》は、当初は内輪の勉強会であったのだが、ここ数年、テーマによっては協会外部にも呼びかけ、参加者を募ってきた。今回も書協の電子出版委員会・著作権委員会に呼びかけ、メーリングリストや印刷関係の業界誌でも案内した結果、予想を超える八十八名の参加者があった。また、三時間半におよぶ長丁場にも関わらず、途中退席する人はほとんどなく、オンデマンド出版への関心の高さがうかがわれた。

▼中西氏の基調講演

基調講演は、学術専門書の印刷に定評のある京都の老舗・中西印刷の中西専務にお願いした。中西氏には、『活字が消えた日』（晶文社、一九九四年）、『印刷はどこへ行くのか』（同、九七年）などの著書があり、後者のなかでは、すでにオンデマンド印刷を紹介している。また最近では、オックスフォード大学出版局と提携し、日本における英文学術雑誌の海外への発信というプロジェクトによって各界の注目を集めている。

中西氏の講演は「オンデマンド出版とは？」に始まり、旧印刷システムとの比較、コピー機進化型のドキュテック

中西 秀彦氏

熱気溢れる会場

や印刷機型のクイックマスターなど、さまざまな方式とその特徴、利用形態、森林資源の問題を含む社会的背景、インターネットを軸とする技術的背景から将来への期待におよぶ充実した内容であった。

森林資源の枯渇の問題については、開会の挨拶に代えて私も簡単に触れたが、大量生産→大量の返品→断裁処分というサイクルが、いつまでも許されるわけはないだろう。現状のオンデマンド出版が直ちにそれを改善する力となりうるかどうかは疑問だが、「必要な人のために必要な部数を」というオンデマンドの考え方自体は、出版人であるかぎり無視できないはずだ。そしてその実現のためには、インターネットによる受注・製作・配本システムの一体化が不可欠であることも、中西氏は指摘した。

▼オンデマンド三社がめざすもの

三社によるケーススタディは、一社あたり二十分と時間が短く、配布された資料の説明にとどまったのは致し方のないところだろう。

その中では「ブッキング」左田野氏の、「これから各出版社を回ります。土下座してでもコンテンツの提供をお願いしたい」という発言が印象に残った。

なぜ、「土下座してでも」なのか。ブッキングが扱うのは、出版各社が、売れないから品切・絶版にしている書籍である。誰が考えても、そのような商品だけで採算がとれるはずはない。「土下座してでも」欲しいのは、単なるコンテンツではないのだろうと思う。

パネル・ディスカッションではコーディネーターを務めた植村氏が、「オンデマンド各社は印刷会社なのか出版社なのか」という問いを提起していた。権利関係の処理や経費の流れにも関わる重要な問題である。しかし、個人的な印象では、そのどちらでもないような気がする。おそらく、オンデマンド各社がめざしているのは、一種の情報産業なのだ。

ブッキングのサービスには、電子在庫管理、電子商取引が含まれている。紀伊國屋書店のサービスにはデジタルコンテンツのネットワーク販売、ホームページの製作・運用管理がある。デジタル・パブリッシング・サービス（DPS）の場合も企画の立案から販売データのフィードバック

DPS・眞田　毅 氏

電写本・藤本仁史 氏

ブッキング・左田野　渉 氏

までを自社の役割としている。このような、インターネットを介した出版社との新たな結びつき、読者をも取り込んだ書籍業界の再編成こそが、各社の目標ではないのかという印象を持った。だとすれば、大手取次店や書店が、こぞってこの事業に参入してきたことが理解できる。――ただし、これは私見にすぎない。協会、あるいは編集部会の公式見解ではないことを明記しておかねばなるまい。

単にオンデマンド出版をするのであれば、上記三社に依頼する必要など、本来はどこにもない。オンデマンドの機械を持っている印刷会社にデータを渡せばいいのであって、この場合は単なる印刷・製本様式を変えた重版だから、権利関係もそれほど複雑なことにはならない。経費も安くつくはずだ。上記三社に依頼するのであれば、出版社の側も、採算だけではなく、各社が提供する情報・サービスにどれだけの価値を認めるか、それをいかに利用するか（いかにして利用できる態勢を作るか）を考えなければ意味がない。

▼DTPあってのオンデマンド

散会後、中西氏と居酒屋でしばし懇談する機会を得た。そこで再確認できたのは、「DTPあってのオンデマンド」ということだった。スキャニングデータの利用は過渡期的な形態にすぎない。組版データ自体を利用するのが理想的だが、CTSの場合には変換に相当な手数と費用がかかる。それに対して、DTPであればたいていの場合はそのまま利用できるからだ。

雑誌の世界では今やDTPは常識だが、書籍出版界にはDTPを安かろう悪かろうの典型としか見ていない人も多い。さらに、デジタルデータは誰のものか、誰が、どのようなメディア・形式で保存するのかついて、きわめて曖昧なままに放置されているケースが多いように見受けられる。オンデマンド出版を考えるならば、まずデジタルデータの保存とその蓄積について、真剣に考えなければならないだろう。（二次利用できる）デジタルデータの価値は、紙型やフィルムとは比較にならないほど高いのである。

（法政大学出版局）

歩く・見る・聞く
知のネットワーク 17

京都の「戦争遺跡」を歩く

近現代史を発掘・記録する新しい方法

■「軍都」としての京都

一五年戦争と日本の都市・地域とを結びつけるとき、真っ先に思い浮かぶのは、普通、広島、長崎そして沖縄であろうか。体験によっては、大空襲を受けた東京や大阪を想起する人もあろう。一方、京都ほど戦争のイメージとかけ離れた町はない、と多くの方は思われるに違いない。戦争末期、日本の主な工業都市は悉く空襲を受けたわけだが、今でも「京都に空襲はなかった」と信じている人も多い。

実際には私の知る限りでも、京都市域も含め府下四〇カ所以上が、一九四五年一月から八月にかけて攻撃を受け、三四六人が死亡、六〇〇人以上が負傷している。一回の被害が最も大きかったのは、七月二九日の舞鶴海軍工廠に対する空襲であり、一発の爆弾で勤労動員の女学生ら九七名が亡くなっている（この爆弾は、「パンプキン爆弾」と呼ばれた原爆投下演習用の大型弾であったといわれる）。

海軍工廠とは、海軍の艦艇や兵器、弾薬を製造した機関であり、日本海軍の拠点機関である鎮守府（他に横須賀、呉、佐世保）に併設されていた。鎮守府は、今の感覚でいえば海上自衛隊総監部であるが、もとよりその規模は遙かに大きい。一方、陸軍の戦略単位は師団である。戦時は数多の師団が編成されたが、平時は一七、京都には現在の伏見区に司令部を持つ第十六師団が置かれた（この部隊は南京大虐殺を引き起こし、後にはフィリピンで全滅した）。

これら鎮守府と師団すなわち日本陸海軍の拠点が、一つの府県に併せて存在したのは、実は広島と京都だけである。当然、それらを支える機関・施設も府内には数多く存在した。また、府下の商工業も膨大な軍需に応えていた。西陣織や清水焼といった伝統産業もまた、例外ではない。一般に、地域に存在する大きな機関（企業、大学、基地等々）は、その地域の文化的雰囲気を形作る。今でも舞鶴等は基地の町としての色彩が濃いが、もちろん戦前の京都にもそうした「軍都」の雰囲気があったわけである。

写真１　旧陸軍第十六師団司令部本館
（京都聖母学院・京都市伏見区）

写真２　旧陸軍宇治火薬製造所跡
（京都大学宇治構内・宇治市五ヶ庄）

■語られなかった歴史を示す「戦争遺跡」

このように、ある意味では広島とならぶ軍事拠点であった京都が、米軍の攻撃を免れるはずもなかった。実際、一時期、京都が原子爆弾の攻撃目標都市として注目されていたことも、現在では明らかにされている。

こうした事実がなぜ広く知られていないのか、あるいは語られてこなかったのかについては、ここでは触れない。ただ、私たちが注意して町を見渡せば、過去を語るものは、実は数多く存在する。一般に軍事施設は、その性格上強固に作られ、そのため完全な破壊や風化を免れる。また、軍関係の土地・建物の多くは国有財産として戦後公的機関に引き継がれ、利用されていった経緯もある。さらに、土地境界を示す標柱等も、大きな開発がない限り、そのまま放置されることが少なくない。このようにして残った一五年戦争関連の遺物を総称して、「戦争遺跡」と呼ぶ。

写真2は、京都大学宇治構内に残る戦争遺跡であり、日本がアジアの民衆の上に降らせた陸軍の爆薬の開発・製造に関係している（また舞鶴の京大水産実験所には海軍爆薬部の跡もある）。また写真1は、旧陸軍第十六師団の司令部の建物であるが、現在は京都聖母学院の学舎として使われている。こうした建物の他、小さな標柱や鉄道廃線跡等も含めると、京都府下の戦争遺跡は二〇〇カ所以上になる。

■歴史を知る努力――発掘と保存へ

歴史を知り、語り継ぐ上での戦争遺跡の役割に注目したのは、京都の府立高校で長く日本史を講じておられた池田一郎氏である。氏は、生徒たちに近現代史を体験的に学ばせることに苦心してこられた。時とともに身近に戦争を体験した者を持たない世代が増え、聞き取りによる学習は難しくなる。そうした中、身近な物に歴史を語らせる日本史の方法を見出されたわけである。そして一九七〇年代の半ば頃から、授業の一環として、生徒らとともに戦争遺跡を丹念に調査してこられた。京都出身でもない、しかも若輩の私が、今住む町の戦災史を多少なりとも学ぶことが出来たのは、ひとえに氏と出会い、導かれたおかげである。

池田氏は、京都での調査に大きな成果を上げられた後、そのフィールドを全国にまで拡げ、今、「戦争遺跡保存全国ネットワーク」を組織してその運営をリードされている。この運動は、遺物によって現代史を知る取り組みとして、学界でも注目されている。

昨今、一部の論者によって「歴史観」の見直しが云々されている。しかし、どういった立場をとるにせよ、事実を知ることなしにはその議論は空虚であろう。新しい時代を見通すためにも、二〇世紀がどんな時代だったかを語る町の遺跡を探ねてみてはいかがだろうか。

（京都大学学術出版会・鈴木哲也）

＊写真はいずれも池田一郎・鈴木哲也『新装版・京都の「戦争遺跡」をめぐる』（つむぎ出版、一九九六）から。撮影：池田一郎氏。

大学出版部ニュース

▼一九九九年度年末例会・懇親会開催

十二月一日、東京・市ヶ谷のアルカディア市ヶ谷（私学会館）で、一九九九年度年末例会・拡大幹事会、部会、懇親会が開催されました。

例会・拡大幹事会では、新規加盟校、オンデマンド出版、二〇〇〇年八月開催予定の三か国合同セミナー等の問題が討議されました。五時半からは恒例の懇親会に移り、幹事校を代表して㈶放送大学教育振興会・加藤義行常務理事が挨拶、引き続き山下正幹事長が開会の辞を、関野利之顧問の発声で乾杯が行われ、宴は夜遅くまで盛り上がりました。

▼三か国合同セミナーと国際専門委員会

第四回日・韓・中大学出版部協会合同セミナーが二〇〇〇年八月、滋賀県で開催される。

一九九七年に始まる三か国合同セミナーは、日・韓・中を一巡し、様々な大学出版の現状と課題が提出されると同時に、セミナーのあり方についても検討すべき時期に差しかかっていると言える。

大学出版部協会では三か国合同セミナーの将来展望とあるべき方向性を探るべく「国際専門委員会」を発足させ、毎月一回の委員会を開いて二〇〇〇年セミナーの概案作成を始めるとともに、それ以降の交流の姿を構築しつつある。国際専門委員会は国際担当幹事の三浦義博（東海大学出版会）と渡辺勲（東京大学出版会）、小林敏（慶應義塾大学出版会）、嶋田努（東京電機大学出版局）、笹岡五郎（専修大学出版局）、中村晃司（東海大学出版会）の六名によって構成される。協会加盟出版部各位の積極的なご支援をよろしくお願いします。

北海道大学図書刊行会

▼松浦啓一・宮正樹編著『魚の自然史』（A5判・三〇〇〇円）多様性をもたらした進化の歴史を比較形態学・分子系統学・生物地理学・繁殖生態学などからアプローチする。▼浅野孝・丹保憲仁監修『水環境の工学と再利用』（A5判・六〇〇〇円）水資源と水利用、自然環境との調和をめざした総合的水管理システムの構築・管理方法に関する成果集。▼葛西清蔵編著『英語学と現代の言語理論』（A5判・五六〇〇円）実用性と理論性を併せもつこと、および英語学と言語理論の関わりをわかりやすく例証・説明することを目的に編まれた論文集。▼山下善平著『里山の昆虫たち』（B5判・二八〇〇円）日本の原風景を象徴する「里山」。失われつつあるこの貴重な環境のなかで棲息する虫たちを六〇〇枚に及ぶカラー写真と達意の文章で紹介。▼道東の自然史研究会編『地質あんない 道東の自然を歩く』（四六判・一八〇〇円）阿寒湖・釧路湿原・知床などに代表される道東の自然史を、千島列島の成立と結びつけて紹介する。本書の刊行で北海道全域を網羅する地質巡検案内書全6巻が完結。

聖学院大学出版会

▼大澤麦・澁谷浩編訳『デモクラシーにおける討論の生誕―ピューリタン革命におけるパトニー討論―』（五八〇〇円）

ピューリタン革命の最中、国王を逮捕した革命軍が今後の方針を討議するためにパトニーで総評議会を開催した。議長をオリバー・クロムウェルが務め、新しい政治体制を主張するレヴェラーズと激しい議論を進めたが、この討論にこそ、互いの違いを理解しあい、共通の目的を発見することをめざす、近代デモクラシー思想の源泉があったとされる。「パトニー討論」の翻訳と訳者解説により、この「討論」の政治思想史における意義を解明する。

▼田村秀夫編著『クロムウェルとイギリス革命』（五六〇〇円）

ピューリタン革命の立役者オリバー・クロムウェルの評価はさまざまであるが、本書では、これまでの研究史を紹介しながら、「クロムウェルの宗教」「クロムウェルと政治」「クロムウェルと国際関係」と多角的観点から、クロムウェルの現代における意義を論じる。

麗澤大学出版会

▼周大観詩／宋芳綺著／千島英一編訳『ぼくにはまだ一本の足がある』（本体一四〇〇円）

台湾の少年詩人・周大観は父母の啓発教育により五歳で『唐詩三百首』と『論語』『孟子』等の四書を暗誦したほどの神童であるが、八歳で小児癌に罹り、片足を切断し、九歳で夭逝した。

しかし癌と闘った大観の不屈の魂と、命そのものの詩は人びとを驚嘆させ涙を誘い、その詩と生涯を綴った書は台湾・香港で大ベストセラーとなった。ついで小中高生の副読本にも指定された。本書はそれを基に編訳した日本語版である。

子供とも思えぬ毅然たる精神と天才的なその詩は世界中の感動を呼び、英・独・仏・西・韓語版のほか、米ディズニープロがそのアニメ映画化を進めている。

『ぼくにはまだ一本の足がある』
本体　1400円（税別）
四六判・上製・208頁

慶應義塾大学出版会

▼湯浅譲二『人生の半ば―音楽の開かれた地平へ』（四〇〇〇円）

平成十年度日本芸術院賞・恩賜賞を受賞するなど国際的に活躍する作曲家、湯浅譲二待望のエッセイ集。一貫した前衛的態度で、音楽の地平を切り開いてきた、その半世紀近い創作活動の背景にある思想、人生観を一冊に凝縮。読者を豊かな音楽世界へと誘う。

▼田代和生『江戸時代　朝鮮薬材調査の研究』（八〇〇〇円）

「宗家文書」の検証をもとに、朝鮮薬材調査の実態を解明した本邦初の研究書。徳川吉宗が命じたこの調査は、朝鮮医学理解のみならず、朝鮮人参の国産化構想も秘められていた！　朝鮮動植物図五六点をカラーで収録。

▼L・S・ペイン著／梅津光弘・柴柳英二訳『ハーバードのケースで学ぶ企業倫理―組織の誠実さを求めて』（五八〇〇円）

企業倫理を確立する、新しい時代の経営戦略とは？　ハーバード・ビジネス・スクールのケースを素材に、〈組織の誠実さ〉の経営上の重要性について貴重な示唆を与える。

産能大学出版部

▼『組織設計概論』波頭　亮著（二六〇〇円）

本書は、収益向上につながる組織立案に必要な組織の概要をまとめたものである。即ち、五つのステップでまとめた組織設計のプロセス、現代の組織制度とその検証、組織変革で高収益をあげている企業の例を取り入れわかりやすく解説。ベストセラーとなった前著『戦略策定概論・企業戦略立案の理論と実際』の姉妹書。

▼『知力創造社会――パラダイム転換の中の戦略的リーダーシップ』レナート・ローリン他著　小林薫訳・解説（二六〇〇円）

社会の変化の道筋は、工業化社会→サービス社会→情報社会、そして知識社会を経由して新しい学習社会へと進みつつある。このような社会での競争力は学習と能力の開発に基づいており、それが組織、戦略、リーダーシップに多大な影響を与えていく。

当初、スウェーデンで出版され、ベストセラーとなって英訳されたものを翻訳したのが本書である。

専修大学出版局

▼石村修著『明治憲法　その獨逸との隔たり』（二五〇〇円）

明治憲法体制の時代は激動の波に翻弄された時代であった。本書は世界史、特に西欧との比較憲法史の中で明治維新を捉え、そしてドイツ選択の経緯を人的側面を中心に説明していく。

明治の政治家や法律家にとって近代立憲主義を理解することがいかに困難であったかを、明治維新時から第二次世界大戦に至るまでの様々な局面で検証している。遡って、明治憲法制定の源流である明治政府が西欧の受容において、いかに近代立憲主義の本質的な部分を放擲してきたかを、特にドイツとの関係で描いている。これが隔たりの所以である。

玉川大学出版部

▼皇紀夫・矢野智司編『日本の教育人間学』（四〇〇〇円）　戦後日本を切り開いてきた日本の教育研究者・思想家一三人の思想・業績を追いながら、その課題と特質を提示。▼P・ジャクソン／徳久球雄・吉富亨訳『文化地理学の再構築―意味の地図を描く―』（四五〇〇円）経済・歴史・文学など広範な分野に潜む支配と従属の政治力学を読みとり、ダイナミックに変動する人間社会の地理空間を描く。▼S・ロスブラット／吉田文・杉谷祐美子訳『教養教育の系譜―アメリカ高等教育にみる専門主義との葛藤―』（三四〇〇円）社会の発展につれて変わってきた大学の役割や古代の伝統と理想が近現代に与えてきた影響を辿りつつ、リベラル・エデュケーションを貫く精神に多面的に迫る。▼A・ベルトラン&P・カレ／松本栄寿・鈴木清子訳『電気の精とパリ』（三八〇〇円）かつては近代化の象徴とされ、現在では当たり前のように使われている電気は、いかにしてわれわれの生活に浸透してきたのか。フランスにおける電気の歴史と社会・文化に与えた影響を読み解きながら、その問いに迫る。

中央大学出版部

▼細内信孝著『コミュニティ・ビジネス』（二〇〇〇円）

いま地域コミュニティのもつ基礎集団としての役割が改めて見直されようとしている。大都市・地方都市商店街の衰退化、後継者不足、中小・零細企業の企業系列からの自立化、また中高年サラリーマンまでが企業から放出されるという状況の中、住民が安全で快適な環境のもとに自立して生き生きと暮らしていくには、コミュニティとの結びつきがより大切な要素となってくる。

本書は、住民自治による新たな社会開発を内外の事例に探り、閉塞する時代を地域力で乗り切る方途に迫る。実際にまちづくりや地域に密着した新事業、地域の再活性化を考えている人々には、大いに役立ち、羅針盤の役割を果たす好著。

東海大学出版会

▼上野輝彌・坂本一男『魚の分類の図鑑―世界の魚の種類を考える―』（二八〇〇円）

水中で泳いでいる魚を観察したり、食材として、釣りや鑑賞、また研究の対象として、魚のいろいろな面に興味をもって接すると、私たちは魚の名前、魚の種類、どんな仲間に近いのかなど、いろいろな疑問がわいてくる。

この本では、世界中の魚を分類学でいう目と亜目のレベルでまとめて、できるだけわかりやすい特徴や最古の化石の時代、含まれる科の名称、各科に含まれる種類、分布などが簡単にわかるように書いてある。世界の魚の分類と分布とカラーの図鑑を一緒にまとめた「魚を学ぶための第一歩」のガイドブックである。

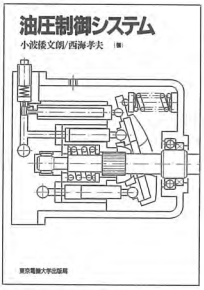
東京大学出版会

「言語」といえばいわゆる文科系の学問の対象とするものというイメージが強い。しかし近年「計算」という視座から言語を数学的方法論でみる動きが活発になってきた。▼その研究は、コンピュータ・ネットワーク社会を支える最も重要な技術を生み、人間の言語処理過程の解明に貢献し、さらに言語学や心理学・神経科学など隣接諸分野と実り豊かな境界領域を形成しつつある。▼この刺激的な分野の成果を日本で初めてまとめたのが、十一月より刊行開始されたシリーズ『言語と計算』全5巻（辻井潤一編、各三八〇〇円）。編者は分野開拓者の一人、各巻は気鋭の若手研究者による書下しだ。1・文法理論の形式化と計算（辻井潤一）、2・モデル理論的意味論（金沢誠）、3・談話と対話（石崎雅人・伝康晴）、4・確率的言語モデル（北研二）、5・情報検索と言語処理（徳永健伸）。いずれも基礎から最先端までを系統的に学べる教科書だ。▼しかも付録つき。医学・社会学など幅広い分野の研究者による興味深いエッセイが楽しめる。「言語と計算」からは広大な世界が広がっている。

東京電機大学出版局

油圧を利用した装置は、例えば自動車一つにとってみても、ハンドルからブレーキまですぐ思い当たるように、我々の日常生活に深く浸透している。もはや何の目新しさもないのではと思うほど普及した技術だが、コンピュータによる制御と結びついて、新しい地平を開きつつある。特に航空宇宙の分野とは相性が良く、あらゆる形で応用されている。旅客機の操縦システムが三重になっていることはよく知られているが、では何かと尋ねられて、「電気」「油圧」「手動」などと答える人が多い。そうではなく、油圧を働かせるための駆動ポンプに三重の動力源があるということなのだ。

本書は、技術者の参考書、大学院生の教科書として、油圧機器・油圧制御システムの基礎から応用までを詳解した。



『油圧制御システム』
小波倭文朗・西海孝夫著
本体3800円(税別)
A5判上製・306頁

東京農業大学出版会

おすすめ書籍紹介

▼『名園の見どころ』
河原武敏著（一七四八円）

日本庭園一六〇を解説したもの。名園の場所や、園内の平面図を掲載しており名園鑑賞する方は、是非一冊携帯を。

▼『モンゴル一〇〇の素顔―もう一つのガイドブック―』（一五〇〇円）

一般の旅行案内では得られない、モンゴルの情報を提供する目的で編纂されたもの。写真を中心に、文章も平易にまとめられている。モンゴル旅行の際には、心強い味方となると思います。

▼『野菜栽培あれこれ』
米安　晟著（一四五七円）

50年間の野菜作りの実践と研究から、まとめたもの。著者の経験談を交えた読み易い文体で、内容も豊富。野菜作りや家庭菜園を行っている方には、参考になることが盛りだくさんです。

▼『盆栽技術入門』
槙松　敬著（一七四八円）

盆栽を始める人のための入門書。樹形の基本から、用具、樹木の選び方など、ていねいに解説されている。

法政大学出版局

▼小山幸子『ヤマガラの芸』二二〇〇円

ヤマガラと聞いて、ああ、おみくじを引く鳥か、とイメージできる人はまだ多い。小さなお宮の賽銭箱に、嘴でつまんだ一円玉を入れ、鈴を鳴らし、祠の扉を開けて中からおみくじを取り出し、なんと脚をつかって封を切る。こんな凄い芸当をする鳥が、かつては縁日や見せ物小屋で人気を博していた。わたしたちは、動物行動学が専門の著者に導かれて、ヤマガラ芸の世界へ案内されるのだが、それは科学的であると同時に歴史的、文学的であり、しかも社会学的でもあるような、実に魅力的な世界で、ほとんどこれ一冊で「ヤマガラ芸博物館」をなしていると言っていい。……しかし本書が単なるヤマガラ研究を超えて、人間と動物の関係学とも言うべき新たな地平を獲得しているのは、むしろ後半になって展開される、動物芸一般に対する考察による。……その文化的な背景を明らかにしつつ、動物芸の核心にあるものがあぶり出されてゆく。……まさしく鳥のように軽やかで、スリリングな好奇心が躍動している。

（読売新聞／港千尋氏評より抄録）

放送大学教育振興会

▼平成十二年三月刊行予定の放送大学印刷教材（開設改訂科目）八十一点の編集作業は、今たけなわ。主任講師・分担執筆者合わせて約三百名、編集担当者約五十名が、資料収集・原稿執筆、原稿回付・校正にと、大わらわの毎日である。

▼放送大学授業科目別受講者数ランキング（平成十一年度第二学期。カッコ内は受講者概数：単位百名。外国語を除く。）①心理学入門(47)、②カウンセリング(41)、③老年期の心理と病理(29)、④発達心理学(28)、⑤こころの健康科学(26)、⑥病気の成立ちと仕組み(25)、⑦乳幼児心理学(24)、⑧フロンティア人間科学(23)、⑨人格心理学(22)、⑩児童心理学(22)、⑪精神分析学(21)、⑫児童の臨床心理(20)、⑬臨床心理学概説(20)、⑭心理測定法(20)、⑮心理学史(20)、⑯地球環境を考える(19)、⑰日本の自然(18)、⑱教育心理学(18)、⑲看護学概論(18)、⑳医療・社会・倫理(18)、㉑発がんとその予防(17)、㉒教育の中の言葉(17)、㉓経営学入門(17)、㉔食物の特性とその役割(16)、㉕日本の文化と思想(15)、㉖発掘された古代日本(14)、㉗情報工学(14)、㉘人生の哲学(13)、㉙民法(12)

明星大学出版部

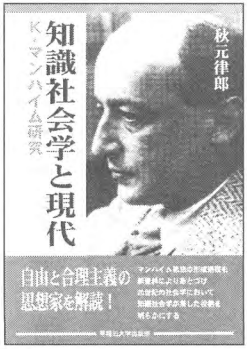
▼塚田紘一著『児童心理学』（仮題）近世に至るまで、子どもは「大人の小さい者」と考えられていた。しかしながら、ルソー（Rousseau, J-J.）の子どもを中心にすえた児童観によって児童は研究対象になる。ルソーは「エミール」の中で「子どもは大人と違ったもの」であり、不完全な大人としてではなく、子どもとして理解されなければならない存在である」と提言した。大人はかつて子どもだったために子どもの心をあたかも知り尽くしていると誤解していた。その誤解を解き、児童の心理が科学的に研究され始めたのは、わずか百余年前に過ぎない。それから児童心理学は日進月歩に発達する。本書では児童の心理の最新情報を解説。（目次―抜粋―）第一章　発達の基礎的理解、第二章　児童研究の方法、第三章　発達初期の展開、第四章　身体と運動機能、第五章　認知、第六章　知能と創造性、第七章　情緒・動機づけ、第八章　遊び、第九章　社会性、第十章　パーソナリティ。「児童心理学」を学ぶ者や、初等教育の教育者を目指す者の必携の書。

早稲田大学出版部

▼〈ワセダ・オープンカレッジ双書3〉『宮沢賢治とはだれか』（原子朗、二五〇〇円）「春と修羅」「セロ弾きのゴーシュ」などを取り上げ、賢治の言葉のリズムやイメージを味わいながら、伝記的側面にも踏み込んだ作家論の決定版。

▼〈早大現代政治経済研究所研究叢書13〉『国際安全保障の新展開―冷戦とその後』（山本武彦編、四五〇〇円）冷戦終結は国際安全保障にどんな影響を及ぼしたのか。その潮流・争点等を検証する。

▼『知識社会学と現代―K・マンハイム研究』（秋元律郎、六四〇〇円）自由と合理主義を提唱し続けたカール・マンハイム。その思想の形成過程を最新の資料をもとに跡づけ、知識社会学が二〇世紀において果した役割を明らかにする。



名古屋大学出版会

▼稲賀繁美著『絵画の東方―オリエンタリズムからジャポニスムへ―』（四八〇〇円）西欧近代美術の内部と外部の臨界を検証し、透過と拒絶の機構、吸収／排除された諸要素の意味と運命を、卓抜な読みと縦横な論理をもって描き出す。

▼吉岡昭彦著『帝国主義と国際通貨体制』（四八〇〇円）国際金本位制完成までの曲折にみちた道程と各国経済の再生産＝信用構造の検討を通して、国際通貨体制の全体的編成とその帝国主義的性格を実証的に解明する。

▼田中秀夫著『啓蒙と改革―ジョン・ミラー研究―』（六八〇〇円）スコットランド啓蒙の到達点を示すミラーの思想を、「文明と自由の自然史」「文明社会史としての国制史」の二つを焦点に解読し、先駆的な仕事の全体像に迫る。

▼オットー・ダン／末川清・姫岡とし子・高橋秀寿訳『ドイツ国民とナショナリズム―一七七〇～一九九〇―』（三八〇〇円）「ドイツ国民」の形成をめぐる葛藤の歴史を国民運動の再評価と民族至上主義ナショナリズム批判の深化を通じて、ヨーロッパ的視野から立体的に描き出す。

京都大学学術出版会

▼『アメリカ国有林管理の史的展開』大田伊久雄著・四五〇〇円／アメリカ人の誰もが美しいと誇りをもつアメリカ国有林――一九世紀末の徹底した伐採と荒廃の歴史を経て、森はいかに回復し、育成されていったのか。その主体となった連邦森林局が「国民のための森林管理」という概念をいかに築き上げ実践してきたかを、百年の歴史を通して解明する。

▼『たちまわるサル―チベットモンキーの社会的知能―』〈生態学ライブラリー7〉小川秀司著・二一〇〇円／ニホンザルは、群れ仲間とつきあっていくための種々の行動パターンを発達させてきた。その独特な世界をわかりやすく紹介する。

▼『日本ザルの自然社会―エコミュージアムとしての屋久島―』高畑由起夫・山極寿一編・二四〇〇円／世界遺産・屋久島における野生ザルの研究は数多くの学術的成果を上げてきた。本書は、採食生態や生活史など様々な領域での成果をまとめるとともに、研究や保護と猿害防止の問題、新たな自然利用形態であるエコミュージアムの取り組みなども紹介する。

大阪経済法科大学出版部

▼九八年度に世界の諸大学と共催された第五回国際学術シンポジウムの報告集の編集が進んでいる。北京大学とは哲学・歴史、フィリピン大学とは法律、復旦大学とは経済、延辺大学とは環境、ハワイ大学とは政治の各部会の報告書がそれぞれ各大学との共同編集で進行し、日本版が順次刊行の予定である。その第一弾は、▼監修　岩崎允胤『世紀の交における哲学思考』（A5判・二六〇〇円）北京大学で開催された哲学部会シンポジウムの諸報告を再編集。この「世紀の交」とは千年紀の交差を象徴し、哲学の課題と展望を論述する。論語や儒学の再検討、核兵器や環境問題の課題等。日本と中国の各報告は多岐にわたる。

▼監修　村下　博『知らなかったではすまされない　アジアの女性と子どもの現実』（A5判・二六〇〇円）フィリピン大学で開催された法律部会シンポジウムの諸報告を再編集。アジアの女性と子どもの地位向上と権利拡大の課題と展望を文化・経済両面より考察した各国の報告を収録。以上二冊が十一月刊行。▼以下、環境・歴史が一月、経済・政治が三月の刊行予定。

大阪大学出版会

二三〇〇年ほど前に生まれ、テクストでわずか三二頁、未完の古典にたいし、現在でも多様な解釈が提示されている。▼**當津武彦『アリストテレス『詩学』の研究（上）―『詩学』の問題と展開―』**A5・五一〇頁・一万円　*Aristotle : Poetics* は、古代ギリシア劇論・詩論としての歴史的・地域的制約を超越して、いまなお世界に刺激を与え続けている。本書は、『詩学』をめぐってルネサンス以来なされてきた二〇〇〇を越える世界の研究成果を参照し、アリストテレスの全哲学体系のなかに位置づけ、文芸学の普遍的な原理として再評価、著者のライフワークの集大成。下巻：『詩学』の背景と後代は二〇〇〇年秋刊予定。

▼脇田晴子、A・ブッシイ、上野千鶴子編著**『Gender and Japanese History (Vol. I/II)』**（英文）菊判・I七四〇〇円／II八四〇〇円　I巻は「宗教と民俗／身体と性愛」、II巻は「主体と表現／仕事と生活」をテーマに、文化的・社会的につくられる性差：ジェンダーの観点から日本史を検討しなおした問題作で、外国の日本研究者との共同研究の成果。

関西大学出版部

▼眞鍋俊二著**『現代日本外交論』**（一六〇〇円）本書は歴史的責任論を念頭に置きつつ二十一世紀の新日本外交の条件を考察したものである。「東方―対米関係」（対米依存問題）、「北方―対露・極東関係」（北方領土・環日本海問題）、「西方―対アジア関係」（戦争責任・戦後補償問題）、「南方―対オセアニア関係」（アジア太平洋外交の新機軸の問題）を取り上げる。▼阿辻茂夫著**『組織決定の科学』**（二八〇〇円）今日、環境問題や生命操作等の現代的課題では、組織決定の社会責任や企業倫理が問われ始めた。本書は組織決定から行動に至る行為過程の背景にある情報過程を取り上げ、そのメカニズムを認知論による視点から解明し、組織決定における全体レベルの知の所在と意味を検討する。▼乾昌明著**『スケッチ・パリを歩きま専科』**（一八〇〇円）パリを歩きま専科シリーズの三作目。パリとゆかりの深い文人・芸術家たちのモニュメントや歴史的建造物などを繊細な線画のスケッチで描き、洒脱なエッセイで解説をつづる。パリの街歩きに役立つガイドブックともなる。

九州大学出版会

▼平嶋義宏**『新版　蝶の学名―その語源と解説―』**（A5判・七六〇頁＋カラー口絵八頁・八五〇〇円）蝶の学名研究の決定版。世界中の約一四〇〇属四六〇〇種の蝶の学名を解説した、世界にも類をみない快著である。鉄砲で撃ち落とされたアレクサンドラトリバネアゲハのタイプ標本などユニークで楽しい図・写真を多数収録。この本なくして蝶の学名は語れない！▼高橋隆雄編**『遺伝子の時代の倫理』**（熊本大学生命倫理研究会論集1）（A5判・二六〇頁・二八〇〇円）ヒト・ゲノムの解析が着々と進み、遺伝子診断や遺伝子治療、クローン技術が実用化しつつある現在という時点は遺伝子の時代の入口に位置しており、それに伴うさまざまな倫理的問題が見え隠れしている。この論集では、遺伝子の時代のもたらす倫理的諸問題の輪郭を素描し、また、その中核にあるものについて、医学、生物学、倫理学の研究者がそれぞれの専門の立場から論じてみた。▼竹熊尚夫**『マレーシアの民族教育制度研究』**（A5判・二〇二頁・四二〇〇円、九八年二月刊）日本比較教育学会一九九八年度「平塚賞」本賞を受賞した。

東北大学出版会

▼樋渡宏一編『ゾウリムシの遺伝学』（A5判・並製・一六八頁・本体二〇〇〇円）単細胞動物ゾウリムシの遺伝はかつては生物学の教科書に必携のトピックスであったが、現在は欧米では研究材料として絶滅危惧種で、唯一の例外は日本であると言われている。この本は、世界の第一線で活躍する日本の研究者が、それぞれの専門的立場からゾウリムシが生物科学の諸分野の基礎的な問題の解析に如何にすぐれた材料であるかを、研究方法や研究の背景を含めて解説した最新の入門書である。▼【医学書】監修者／吉本高志・小谷誠・栗木眞也・刈部博・中里信和『Recent Advances in Biomagnetism』（B5判変型・上製・一一三六頁・本体一〇〇〇円）生体磁気は、脳や心臓内部の電気活動を高い時空間分解能で診断可能である。本書は、一九九六年仙台で開催された国際生体磁気学会で取り上げられた最新かつ広範な話題を、生体磁気シールド、SQUIDシステム、順・逆問題モデル、脳磁図（MEG）・心磁図（MCG）の基礎研究・臨床応用などに加えて、経皮磁気刺激や機能的MRIも含み網羅している。

流通経済大学出版会

▼『常識の交通学―政策と学問の日本型思考を打破―』（角本良平著・二〇四頁・四〇〇〇円）

本書は、著者の永年の交通学研究の集大成とも言える著作である。著者は、前著『交通学130年の系譜と展望―21世紀に学ぶ人のために―』の中で明治以降の我が国の交通学の展開過程を概観し、交通研究に経済学の手法が導入され、理論的な精緻さが追求されるに従い、交通学が交通の実態から乖離し政策的にも有効な提言を為し得なくなったとして交通学の現状を批判的に分析している。

本書では、その原因を詳らかにし、それは交通の領域のみならず日本の社会に根源的に存在する、「責任を負うべき主体が自主性を持たず、何事も他人任せにする態度」即ち「日本型思考」に他ならない、と喝破している。そして「国民は政府まかせ、政府と学会は外国の権威や発想に頼り、議論を尽くさない態度」を打破しない限りわが国は現在の閉塞状態から脱することは出来ない、と警告しているのである。

三重大学出版会

▼『レーザー光化学』（佐藤博保著、二三〇〇円）本書はレーザーの原理に関する基礎化学と材料科学への応用について平易にまとめたものである。特に応用面については切断等の材料加工から、分子内の特定部分に選択的な反応をもたらす可能性を秘めたコヒーレンスの活用、および量子コンピュータの原理にいたるまで、幅広い知見を体系的に修得する事が可能になっている。各章末には詳細な引用文献が掲載されているほか、推奨される参考文献や索引も充実しておりレファレンスとしても重宝する。

▼『入門物理学』（長井努著、一五〇〇円）近年、理工系学生にも高校物理の授業を受けていない未習者が増えてきた。本書は数式をできるだけ使わずに入門的な物理学を指導するための教科書として書かれている。具体的に言えば利用する数式は、等式や比例式、三角関数、簡単な微分・積分、ベクトルの加減等にとどめ、偏微分や微分方程式などはあえて使っていない。その代わり豊富な図版を掲載し、初学者の理解を助けている。巻末には各章ごとの演習問題が豊富に掲載。

新刊案内 '99・10～'99・12

■北海道大学図書刊行会
核融合物理工学　日野　友明　三〇〇〇円
プラズマ物理工学　日野　友明　三〇〇〇円
里山の昆虫たち―その生活と環境―　山下　善平　二八〇〇円
地質あんない　道東の自然を歩く　道東の自然史研究会編　一八〇〇円
ハイデガー哲学とナチズム　ロックモア／奥谷浩一ほか訳　六八〇〇円
統計学の思想と方法　杉森滉一・木村和範編著　三八〇〇円

■聖学院大学出版会
デモクラシーにおける討論の生誕―ピューリタン革命における
パトニー討論―　大澤麦・澁谷浩編訳　五八〇〇円
クロムウェルとイギリス革命　田村秀夫編著　五六〇〇円

■麗澤大学出版会
ぼくにはまだ一本の足がある　周大観詩・宋芳綺／千島英一編訳　一四〇〇円
統計学のおかげで生き延びた
―暮らしとビジネスに数字を活かそう―　宮川公男　四〇〇円

■慶應義塾大学出版会
人生の半ば―音楽の開かれた地平へ―　湯浅　譲二　四〇〇〇円
日本橋街並み商業史　白石　孝　三〇〇〇円
江戸時代・朝鮮薬材調査の研究　田代　和生　八〇〇〇円
アジアの環境文化　薬師寺泰蔵編　二六〇〇円
ハーバードのケースで学ぶ企業倫理―組織の誠実さを求めて―
L・S・ペイン／梅津光弘・柴柳英二訳　五八〇〇円
浅利慶太の四季　著述集3
―伝統と現代のはざまで　文化・芸術展望―　浅利　慶太　三四〇〇円
都市論と生活論の祖型―奥井復太郎研究―
川合隆男・藤田弘夫編著　五六〇〇円
現代国際法　栗林　忠男　四八〇〇円
正論自由　第十四巻―近代日本社会史上における
『失楽園』の位置―　中村　勝範　二六〇〇円
近代日本人のアメリカ観―日露戦争以後を中心に―　澤田　次郎　四〇〇〇円
共同研究　太平洋戦争と慶應義塾
白井厚監修／慶應義塾大学経済学部白井ゼミ著　四〇〇〇円
プルーストの詩学〈慶應義塾大学法学研究会叢書別冊〉　櫻木　泰行　九〇〇〇円

■産能大学出版部
知力創造社会　L・ローリンほか／小林薫訳・解説　二六〇〇円
売買契約の基礎知識　奈良　武　三〇〇〇円
オプションマネジメント　加藤　雄一　一五〇〇円
お客様は悪魔！―悪魔を魅了するサービス改善―
日本HR協会編　二〇〇〇円

■専修大学出版局
明治憲法　その獨逸との隔たり　石村　修　二五〇〇円

■玉川大学出版部
小笠原流　はじめての礼法　前田紀美子　一六〇〇円
日本の教育人間学　皇紀夫・矢野智司編　四〇〇〇円
文化地理学の再構築―意味の地図を描く―　P・ジャクソン／徳久球雄・吉富亨訳　四五〇〇円
日本の近代技術はこうして生まれた　―産業遺産をヒントに考える―　馬渕　浩一　三二〇〇円
二〇世紀のアメリカ西部―未来を映す都市オアシス文明―　G・ナッシュ／朝日由紀子訳　五八〇〇円
教養教育の系譜―アメリカ高等教育にみる専門主義との葛藤―　S・ロスブラット／吉田文・杉谷祐美子訳　三四〇〇円
よみがえれ教師の魅力と迫力　上田　薫　二五〇〇円
都市型大学―新しい高等教育像への挑戦―　P・G・エリオット／岩田弘三訳　四七〇〇円
電気の精とパリ　A・ベルトラン&P・カレ／松本栄寿・鈴木清子訳　三八〇〇円

■中央大学出版部
現代アメリカ外交の研究　坂本正弘・滝田賢治　二九〇〇円
中小企業の現状とこれからの経営―二十一世紀の中小企業経営―　前田重朗・石崎忠司編著　三九〇〇円
コミュニティ・ビジネス　細内　信孝　二〇〇〇円
現代財政の研究　綱辰幸・藤原碩宣他編著　四〇〇〇円
国際仲裁と国際取引法　多喜　寛　六四〇〇円
戦略的企業管理論の構想―ドイツ学説の研究―　加治　敏雄　二九〇〇円
憲法機軸の周縁　清水　睦　二六〇〇円
国際私法の基本的課題　多喜　寛　五二〇〇円

■東海大学出版会
国際通信の日本史―植民地化解消へ苦闘の九十九年―　石原　藤夫　二〇〇〇円
規範と意味―ソクラテスと現代―　三嶋　輝夫　三五〇〇円
現代イギリスの産業競争力政策　阿部　望　五五〇〇円
診療放射線演習ブック―技術編―　原田芳廣編著　三五〇〇円

■東京大学出版会
東京大学法学部白書　一九九七・一九九八〈研究・教育年報15〉　三八〇〇円
ニュースの誕生―かわら版と新聞錦絵の情報世界―　〈東京大学コレクションⅨ〉　木下直之・吉見俊哉編　三八〇〇円
江戸絵画と文学―〈描写〉と〈ことば〉の江戸文化史―　今橋　理子　六〇〇〇円
近代ロシアへの転換―大改革時代の自由主義思想―　竹中　浩　七二〇〇円
教材　刑事法入門　大越義久編著　二四〇〇円
20世紀ドイツ資本主義　工藤　章　一五〇〇円
構造主義生物学　柴谷　篤弘　二八〇〇円
帝国議会貴族院委員会速記録　昭和篇117　国立国会図書館所蔵　一四〇〇〇円
帝国議会衆議院委員会議録　昭和篇153　国立国会図書館所蔵　一八〇〇〇円
確率的言語モデル〈言語と計算4〉　北　研二　三八〇〇円
情報検索と言語処理〈言語と計算5〉　徳永　健伸　三八〇〇円
こよみ〈東京大学公開講座70〉　蓮實重彦著者代表　二六〇〇円
古代文書論―正倉院文書と木簡・漆紙文書―　石上英一・加藤友康・山口英男編　六八〇〇円
武士の成立　武士像の創出　高橋　昌明　五二〇〇円
倭寇と日麗関係史　李　領　八八〇〇円

仕事の中での学習―状況論的アプローチ―　上野　直樹　二七〇〇円
〈シリーズ人間の発達9〉
講座社会学2　家族　目黒依子・渡辺秀樹編　二八〇〇円
社会政策のなかの現代―福祉国家と福祉社会―　武川　正吾　四八〇〇円
〈社会学シリーズ〉
メディアと公共圏のポリティクス　花田　達朗　四〇〇〇円
環境昆虫学―行動・生理・化学生態―
日高敏隆・松本義明監修／本田計一・本田洋・田付貞洋編　八五〇〇円
逆問題の数理と解法―偏微分方程式の逆解析―
登坂宣好・大西和栄・山本昌宏　三八〇〇円
帝国議会貴族院委員会速記録　昭和篇118
国立国会図書館所蔵　一四〇〇〇円
帝国議会衆議院委員会議録　昭和篇154
国立国会図書館所蔵　一八〇〇〇円
維新と人心　伊藤　彌彦　六六〇〇円
明清交替と江南社会―17世紀中国の秩序問題―
岸本　美緒　五六〇〇円
心とことばの初期発達―霊長類の比較行動発達学―
竹下　秀子　五六〇〇円
高度成長期の政治学　大嶽　秀夫　二四〇〇円
刑法各論講義［第3版］　前田　雅英　三七〇〇円
地震活動総説　宇津徳治　二二〇〇円
銀河系と銀河宇宙　岡村　定矩　五二〇〇円
帝国議会貴族院委員会速記録　昭和篇119
国立国会図書館所蔵　一四〇〇〇円
帝国議会衆議院委員会議録　昭和篇155
国立国会図書館所蔵　一八〇〇〇円

■東京電機大学出版局

水理学演習　有田正光・中井正則　三四〇〇円
油圧制御システム　小波倭文朗・西海孝夫　三八〇〇円
たのしくできるPIC電子工作　後閑　哲也　二七〇〇円
学生のためのAccess　若山芳三郎　一七〇〇円
高校生のためのWord&Excel　若山芳三郎　九五〇円
電気設備技術基準　審査基準・解釈―平成11年11月改正―
東京電機大学編　九〇〇円

■東京農業大学出版会

仮象小史―古代からコンピューター時代まで―
N・ボルツ／山本尤訳　二三〇〇円
梅Ⅰ〈ものと人間の文化史92―Ⅰ〉　有岡　利幸　二八〇〇円
梅Ⅱ〈ものと人間の文化史92―Ⅱ〉　有岡　利幸　三二〇〇円
スウィング―ビッグバンドのジャズとアメリカの文化―
D・W・ストウ／湯川新訳　四七〇〇円
知の全体史　C・V・ドーレン／石塚浩司訳　八四〇〇円
世界という実験―問い、取り出しの諸カテゴリー、実践―
E・ブロッホ／小田智敏訳　四五〇〇円
啓蒙の民主制理論―カントとのつながりで―
I・マウス／浜田義文・牧野英二監訳　四五〇〇円
男たちの妄想Ⅰ―女・流れ・身体・歴史―
K・テーヴェライト／田村和彦訳　八五〇〇円
イェーナ体系構想―精神哲学草稿Ⅰ・Ⅱ―
G・W・F・ヘーゲル／加藤尚武編訳　五七〇〇円
十二支動物の話―子丑寅卯辰巳篇―　井本　英一　三二〇〇円
十七世紀イギリスの文書と革命―クリストファー・ヒル評論集Ⅰ―
C・ヒル／小野功生・圓月勝博・箭川修訳　六三〇〇円
グーテンベルク銀河系の終焉―新しいコミュニケーションの
すがた―　N・ボルツ／識名章喜・足立典子訳　三三〇〇円
法の力　J・デリダ／堅田研一訳　二三〇〇円

パウル・ツェラーンの場所
H・ベッティガー／鈴木美紀訳　一九〇〇円
東方の帝国―悲しみのインドネシア―
N・ルイス／野崎嘉信訳　四七〇〇円
絵画を破壊する　L・マラン／尾形弘人・梶野吉郎訳　二八〇〇円
批評の地勢図　J・H・ミラー／森田孟訳　六〇〇〇円
民主評論（全五巻）
法政大学大原社会問題研究所編　全五巻セット　一四万円

■放送大学教育振興会

■明星大学出版部

■早稲田大学出版部
知識社会学と現代―K・マンハイム研究―　秋元　律郎　六四〇〇円
エジプトの都市社会　店田　廣文　五〇〇〇円
ワセダ・オープンカレッジ双書第3巻
宮沢賢治とはだれか　原　子朗　二五〇〇円
早稲田大学現代政治経済研究所研究叢書第13巻
国際安全保障の新展開―冷戦とその後―　山本武彦編　四五〇〇円
叢書ワセダ・リブリ・ムンディ
㉓イギリスの政治―改革に揺れる伝統国家―　川勝平太・三好陽編　二九〇〇円
平和研究　第24号　特集・いま日本の「国際貢献」を問う　日本平和学会編　三二〇〇円
スポーツにおける違法性と阻却〈日本スポーツ法学会年報第6号〉　日本スポーツ法学会編　四五〇〇円

■名古屋大学出版会
啓蒙と改革―ジョン・ミラー研究―　田中　秀夫　六八〇〇円
ドイツ国民とナショナリズム―一七七〇～一九九〇―
オットー・ダン／末川清・姫岡とし子・高橋秀寿訳　三八〇〇円

■京都大学学術出版会
たちまわるサル―チベットモンキーの社会的知能―
〈生態学ライブラリー7〉　小川　秀司　二一〇〇円
アメリカ国有林管理の史的展開　大田伊久雄　四五〇〇円
ニホンザルの自然社会―エコミュージアムとしての屋久島―
高畑由起夫・山極寿一編　二四〇〇円
地域研究の問題と方法―社会文化生態力学の試み―［増補改訂版］
〈地域研究叢書3〉　立本　成文　四四〇〇円
Toward the Exact WKB Analysis of Differential Equations, Linear or Non-Linear
C・J・ホールズ&河合隆裕&竹井義次編　六六〇〇円

■大阪経済法科大学出版部
世紀の交における哲学思考　岩崎允胤監修／大阪経済法科大学・北京大学哲学系編　二六〇〇円
知らなかったではすまされない　アジアの女性と子どもの現実
村下博監修／大阪経済法科大学・フィリピン大学編　二六〇〇円

■大阪大学出版会
アリストテレス『詩学』の研究(上)―『詩学』の問題と展開―　當津武彦　一〇〇〇〇円

■関西大学出版部
現代日本外交論　眞鍋　俊二　一六〇〇円
フランス急進社会党研究序説　土倉　莞爾　三二〇〇円
スケッチ・パリを歩きま専科　乾　昌明　一八〇〇円

中近東の水車・風車　末尾　至行　四六〇〇円
組織決定の科学　阿辻　茂夫　二八〇〇円

■九州大学出版会
アジアの都市計画　日本都市計画学会九州支部編　三八〇〇円
現代日本メーカーの生産・物流「改訂版」
―海外進出・経営の課題を中心として―　国狭武己　三二〇〇円
現代のイギリス経済〈久留米大学経済叢書5〉　中村　靖志　三八〇〇円
新版　蝶の学名―その語源と解説―　平嶋　義宏　八五〇〇円
Business Associations in Japan and the United States: Collective Action and Authority Structure　鈴木　譲　一〇〇〇〇円
遺伝子の時代の倫理〈熊本大学生命倫理研究会論集1〉　高橋隆雄編　二八〇〇円
コミュニケーションの諸相　石丸　暁子　二四〇〇円
アジア都市政府の比較研究〈アジア太平洋センター研究叢書7〉
―福岡・釜山・上海・広州―　今里滋編著　三八〇〇円
山村の保続と森林・林業　堀　靖人　三六〇〇円
詩歌の表現―平安朝韻文攷―　金原　理　三四〇〇円
冬の目覚め―ロバート・グレイヴズの詩と批評―　園井　英秀　六〇〇〇円

■東北大学出版会
玉虫左太夫『航米日録』を読む―日本最初の世界一周日記―　小田　基　二五〇〇円
文学的思考へのいざない　大河原忠蔵　二五〇〇円

■流通経済大学出版会
常識の交通学―政策と学問の日本型思考を打破―　角本　良平　四〇〇〇円

■三重大学出版会
レーザー光化学　佐藤　博保　二三〇〇円
入門物理学　長井　努　一五〇〇円

ISSN 0913-3305

大学出版部協会加盟出版部一覧

北海道大学図書刊行会	〒060-0809 札幌市北区北 9 条西 8 丁目　北大構内 TEL. 011-747-2308　FAX. 011-736-8605
聖学院大学出版会	〒362-8585 埼玉県上尾市戸崎1－1 TEL. 048-725-9801　FAX. 048-725-0324
麗澤大学出版会	〒277-8686 千葉県柏市光ヶ丘 2 －1－1 TEL. 0471-73-3331　FAX. 0471-73-3154
慶應義塾大学出版会	〒108-8346 東京都港区三田 2 －19－30 TEL. 03-3451-6926　FAX. 03-3454-7029
産能大学出版部	〒152-0035 東京都目黒区自由が丘2-16-5 自由が丘昭和ビル TEL. 03-3724-9101　FAX. 03-5701-7499
専修大学出版局	〒101-0051 東京都千代田区神田神保町3-8-3 専修大学4号館 TEL. 03-3263-4230　FAX. 03-3263-4288
玉川大学出版部	〒194-8610 東京都町田市玉川学園6－1－1 TEL. 042-739-8935　FAX. 042-739-8940
中央大学出版部	〒192-0393 東京都八王子市東中野742－1 TEL. 0426-74-2351　FAX. 0426-74-2354
東海大学出版会	〒151-8677 東京都渋谷区富ヶ谷2－28－4 TEL. 03-5478-0891　FAX. 03-5478-0870
東京大学出版会	〒113-8654 東京都文京区本郷7－3－1 東京大学構内 TEL. 03-3811-8814　FAX. 03-3812-6958
東京電機大学出版局	〒101-8457 東京都千代田区神田錦町2－2 TEL. 03-5280-3433　FAX. 03-5280-3563
東京農業大学出版会	〒156-8502 東京都世田谷区桜丘1－1－1 TEL. 03-5477-2562　FAX. 03-5477-2643
法政大学出版局	〒102-0073 東京都千代田区九段北3－2－7 TEL. 03-5214-5540　FAX. 03-5214-5542
放送大学教育振興会	〒105-0001 東京都港区虎ノ門1-14-1郵政互助会琴平ビル3F TEL. 03-3502-2750　FAX. 03-3592-2482
明星大学出版部	〒191-8506 東京都日野市程久保2－1－1 TEL. 042-591-9979　FAX. 042-593-0192
早稲田大学出版部	〒169-0071 東京都新宿区戸塚町1－103 TEL. 03-3203-1551　FAX. 03-3207-0406
名古屋大学出版会	〒464-0814 名古屋市千種区不老町 1　名古屋大学構内 TEL. 052-781-5027　FAX. 052-781-0697
京都大学学術出版会	〒606-8501 京都府京都市左京区吉田本町 京都大学構内 TEL. 075-761-6182　FAX. 075-761-6190
大阪経済法科大学出版部	〒581-8511 大阪府八尾市楽音寺6－10 TEL. 0729-41-8211　FAX. 0729-41-9979
大阪大学出版会	〒565-0871 大阪府吹田市山田丘1-1 大阪大学事務局内 TEL. 06-6877-1614　FAX. 06-6877-1614
関西大学出版部	〒564-8680 大阪府吹田市山手町3－3－35 TEL. 06-6368-1121　FAX. 06-6389-5162
九州大学出版会	〒812-0053 福岡市東区箱崎7－1－146 九州大学構内 TEL. 092-641-0515　FAX. 092-641-0172
東北大学出版会(準会員)	〒980-8577 仙台市青葉区片平2－1－1 東北大学構内 TEL. 022-214-2777　FAX. 022-225-2029
流通経済大学出版会(準会員)	〒301-8555 茨城県竜ヶ崎市平畑120 TEL. 0297-64-0001　FAX. 0297-64-0011
三重大学出版会(準会員)	〒514-8507 三重県津市上浜町1515 三重大学出版ホール内 TEL. 059-232-1356　FAX. 059-232-1356

大学出版(第44号) 2000 冬　平成12年1月10日発行　発行所／大学出版部協会
〒113-8654 東京都文京区本郷7丁目3番1号 東大構内 東京大学出版会内 電話03-3812-2111 (内)87956
E-MAIL: mail@ajup-net.com　URL: http://www.ajup-net.com/　頒布価格100円　〒共